

4 海外での 安全管理

—安全対策と危機管理—



南アフリカ事務所のカージャック対策実技訓練

JICAのセキュリティ・メニュー

JICA事業の舞台は開発途上国です。JICAが派遣する専門家やコンサルタント、青年海外協力隊などのボランティアは、それぞれ開発途上国に滞在し、各自の任務を遂行しています。開発途上国は、一般に貧困問題を抱え、そこから一般犯罪が多く発生している国もあります。

また、民主化の進んでいない国ではクーデターのおそれもあり、長年、国の一部で内戦が続いている場合もあります。さらには、内戦終結後の警察や国軍がほとんど機能していない国で活動している関係者もいます。

JICAは、こうした状況下で活動が続ける国際協力の関係者が、開発途上国で安全に暮らし、仕事ができるように次のような安全対策と危機管理を実施しています。

1. 出発前の研修やセミナーの実施

JICAは、出発前の専門家やボランティア、随伴家族をはじめとする関係者に対し、安全対策に関する研修を実施しています。研修では、地域ごとの犯罪や治安の特徴、住居の選び方、現地の人との接し方、貴重品の保管方法、ホールドアップやカージャックなどに関し、防犯と有事の対応の観点から説明を行います。

また、任地に到着した時点で、在外事務所が最新の現地治安状況や防犯対策について個別にオリエンテーションを行っています。加えて、在外事務所

が中心になって全JICA関係者による治安対策連絡協議会を年2回開催しています。この協議会は、現地で活動する専門家やボランティア、随伴家族などを対象に、JICA事務所からの現地安全情報の提供や関係者間の体験や情報の共有化を目的として開催されています。

この協議会では、同じ環境のもとに暮らし、仕事をする関係者の間で、毎日工夫している安全対策の具体的なノウハウが披露されています。たとえば、犯罪被害の対象とならないような目立たない方法として、買い物の際のお金の出し方、持ち歩くバッグはどんなものがいいか、現地の状況にあわせた服装やアクセサリーの付け方、貴重品の保管場所などが、この協議会を通じ、特に滞在の長い人から着任直後の人へ伝達されています。

2. 安全対策クラークの配置

JICAは、現地の安全対策を強化するため、その国の治安や安全対策に詳しい人材を安全対策クラークとして活用しています。安全対策クラークは、日々の安全情報の収集と発信、住居防犯から交通事故対策まで広範囲の仕事を、まさに24時間体制で献身的にこなしています。現地の犯罪傾向を熟知した安全対策クラークは、同時に日本人独自の行動形態を知っており、両者をふまえた適切な安全指導を行っています。

3. 緊急連絡網の構築

JICAは、各在外事務所ごとに、全関係者を網羅した緊急時の連絡体制を構築しています。連絡手段

としては、電話、携帯電話、ポケットベル、インマルサット、衛星携帯電話があり、通常時の関係者間の通信手段として、また有事の安否確認などを想定した連絡手段の確保の二段構えとして、安全対策の重要な柱として位置づけています。

4. 安全対策のための調査団派遣

JICAは、安全上、特に問題がある国に対しては、調査団を派遣して現地の安全状況の確認を行っています。こうした現地調査の結果に基づき、国別の細かな安全措置を講じています。たとえば、ひとつの国のなかでも州ごとの治安状況を分析し、JICA関係者の活動範囲を決めたり、援助ニーズに応える方法を工夫したりしています。

また、一般犯罪の多発している国へは、住居防犯や銃器犯罪対策、カージャック対策の指導のため、

本邦から専門家チームを派遣して、現地に滞在する関係者への直接的な安全指導を行っています。

5. 防犯設備設置や警備員備上経費の補助

専門家やボランティアの住居に対する防犯設備の設置や警備員の備上、アラーム警備体制に関しては、JICAはその経費の一部を補助しています。塀のかさ上げ、ドアや窓枠の補強、鉄格子の設置などの工事を、必要に応じて実施しています。また、警備会社のある国では、アラームシステムによる警備員の呼び出しシステムも活用しています。

6. 24時間危機管理体制の実施

JICA本部は、通常の業務時間外となる平日の夜間や休日の昼夜においても、海外からの緊急連絡を本部において確実に受付け、対応できるよう、365日24時間体制の緊急連絡体制をとっています。

Front Line

ドミニカ共和国 ● 帰国研修員が安全対策クラークとして

技術を伝えてくれた日本人に恩返し

安全対策

国際鑑識セミナーへの参加

2002年1月から2月に大阪で行われたJICA研修「国際鑑識セミナー」に、ドミニカ共和国からの研修員ホセ・ラファエル・カストロさんが参加しました。日本の高い警察の技術に驚きつつ、熱心に取り組んだ研修の1カ月間は瞬く間に過ぎました。全力で技術を伝えてくれた大阪府警をはじめとする日本人のまじめさと暖かさは彼の心をうち、学んだ技術を生かしてドミニカ共和国の治安をよくしていきたいという気持ちとともに、いつか日本人に恩返ししたいと強く思うようになりました。

安全対策クラークとなる

帰国して国家警察の職務に戻った彼に、思いもよらなかった恩返しのチャンスが訪れました。JICAが雇用するアドバイザーで、安全上のアドバイスのほか、事件、事故発生時の対応も支

援する安全対策クラークの後任者を探していたJICA事務所から、帰国研修員であるカストロさんにも声がかかったのです。彼は、仕事内容を確認するとすぐに採用を希望し、2002年5月安全対策クラークとなりました。

日本人のために

治安が悪化傾向にあるドミニカ共和国では、引ったくり、泥棒はもとより、JICA関係者に対する強盗事件も発生しています。事件が発生すると国家警察の担当者にすぐに出勤するよう要請するとともに、彼自身も現場で捜査に加わります。

また、犯罪の再発防止や、被害の予防も彼の重要な仕事です。安全対策連絡協議会を年2回ほど実施し、警察関係者や大使館職員とともに、犯罪の傾向やそれを防ぐ手段について説明を行います。また、住居の見回りなども入念に行います。100人を超える関係者がいるドミニカ共和国ではいくらで



元研修員の安全対策クラーク

も仕事があります。そのひとつひとつを素早く、しかも丁寧にこなし、JICA関係者からはすでに絶大な信頼を得ています。

幸いドミニカ共和国ではここ数年、JICA関係者の間では人身にかかわるような事件は発生していません。しかし、決して治安がよいとはいええないこの国で、安全対策クラークの仕事はますます重要なものとなっています。

(ドミニカ共和国事務所)